

<講演抄録>12. ヒト舌の加齢的变化：組織計測的研究(東日本学園大学歯学会第7回学術大会(昭和63年度総会))

著者名(日)	関 智香子, 中出 修, 大内 知之, 菅野 秀俊, 八重樫 和秀, 阿部 英二, 賀来 亨, 奥山 富三, 小田 真理子
雑誌名	東日本歯学雑誌
巻	8
号	1
ページ	91
発行年	1989-06-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1145/00007451/

12. ヒト舌の加齢的变化—組織計測的研究

関智香子, 中出 修, 大内知之
菅野秀俊, 八重樫和秀, 阿部英二
賀来 亨, 奥山富三, 小田真理子*
(口腔病理, 薬・生化学*)

筋性臓器としての舌は加齢に伴い, 食物の摂取, 発音などの複雑な運動機能の低下を示すと言われている。今回われわれは舌の形態的变化と加齢との関係について, 組織学的, 組織計測的に検討を行った。

材料ならび方法: 主として60~90才の剖検症例から得られた, 肉眼的に特別の病変が認められない舌を使用した。

ホルマリン固定された舌の中央部の前額断標本を切り出し, 通常の5mmのパラフィン包埋切片を作成した。H. E, elastica-van Gieson, PAS-Alcianblueなどの各染色を行い, 舌動脈の内膜の肥厚, 石灰沈着, 舌乳頭の萎縮, 舌体部, 舌腱膜部の脂肪沈着, 舌腱膜部の軟骨様組織の出現などについて, 組織学および画像解析装置により, 組織計測的に検索を行った。

結 果

1. 舌乳頭について

乳頭の萎縮消失は, 加齢とともに程度が強くなり, 粘膜上皮は薄くなる傾向があった。疾患との関連ははっきりしなかった。

2. 舌腱膜部, 舌体部の脂肪沈着は, 加齢とともに増加する傾向があった。

3. 舌動脈(舌深動脈)の硬化の程度, 内膜弾性線維の増生, 内弾力板の断裂, 重層化がほとんどの症例で認められた。動脈狭小化は加齢と共に進行する傾向が認められた。

動脈の石灰沈着は5例と少なかった。

4. 舌腱膜部の軟骨様組織は88例中17例に認められ, 加齢と共に増加している傾向が認められた。

13. ^{32}P で誘発したラット骨肉腫由来の培養細胞(MSK)の subclonal line について

江上史倫, 金沢春幸, 高橋喜久雄
佐藤研一
(千葉大医学部歯科口腔外科)

われわれは, より均一な骨芽細胞性骨肉腫細胞を得るため, 限界希釈法により, ラット骨肉腫由来の培養細胞(MSK細胞)のcloningを行った。結果として, 9つのclone株4D, 4E, 4G, 6A, 8B, 8G, 8H, 10C, 10Hが得られた。その9つのclone株に関する生物学的性状を比較したので報告した。

形態学的には, 各clone株は主にfibroblasticなもの, epithelialなものに区別されたが, 同一のclone株の中においても多少のpleomorphismが観察された。細胞増殖能では, 倍加時間は8Bが最も短く, 飽和細胞密度では, 6A, 8Hが高い値を示した。細胞内ALPase活性は, 8Bで高値を示し, Collagen合成能は8Gが高かった。細胞内cAMPを指標としたヒトPTHに対する応答性は,

特に4Eと6Aの反応性が高かった。

F344ラットに対する戻し移植では, 9つのclone株中8Gの腫瘍性が最も高いと思われた。また, 4Eでは高率に肺転移が観察された。また, 全てのclone株による再形成腫瘍のX線像では, 腫瘍性類骨の石灰化像を認め, 母細胞MSKのそれより比較的多量の石灰化が認められた。組織学的には, 各clone細胞によって再形成された腫瘍に, 多少の差異が認められたが, すべての再形成腫瘍中に類骨形成を認めるosteoblastic typeの骨肉腫の像を呈していた。

In vivoにおけるこれらの性状の違いが何によるものかを現在不明であるが, われわれは各Clone株が, 骨芽細胞様性格を発現するうえで, 異なった分化の段階にあ